

京町家の歴史性と都市景観の再構築

大谷孝彦

OTANI Takahiko

NPO法人京町家再生研究会/理事長
株式会社設計事務所ゲンプラン/取締役



1—美しい都市景観

京町家に暮らす文化人である杉本秀太郎氏は、「かつての京都の町並みには『整序、統一』があり、しかも『みやびやかな差異』があって、『統一における差異』というものが、京都という都市の景観の美しい特色をなしていた。今の京都は『ただ勝手放題な差異』がむき出しになって、町並みはがたがたである。」と言う(写真1)。

現代の社会は歴史、文化、くらしなどに係わるソフトとしての思想、価値観よりも、経済成長、技術革新というようなハード面を優先し、都市景観とコミュニティの破壊を進めてきた。物理的な環境の破壊は、美しく、秩序のある景観を持続するための感性の喪失と、精神的環境の破壊をも招いている。改めて美しい都市景観を再生するためには、美しさに対する感性の再生と、美しい景観に対するアイデンティティを共有すること、そして、その礎となる「歴史性」を認識することが必要である。

京都の都市景観は、自然、人工物、そして、人のくらし



■写真1—町屋の町並 統一における差異 杉本家

を包括的に含む歴史性の上に形成されて来た。「歴史性」とは、その場所に積み重ねられて来た記憶と言う時間の価値であり、その場所の持っている真実性、場所性である。歴史性の正しい確認・継承とそれを確かな根拠とした新たな創造的展開、継承するものと新しいものとの協調(調和、融合)、そして、その両者の共存、係わりには、はりつめた緊張感が必要である。近現代の都市開発、都市整備には、歴史性に対する意識が希薄であったと言える。京町家は、その歴史性を認識、実感、実体験できる具体的対象として、今も京都に息づいている。

2—京町家の歴史性

係わりを大切にした建物とくらしの文化

京町家は千年の都・京都とともに歴史を重ねてきた。物理的にも、文化的にも密度の高い環境の中で、町家はそこに暮らす人々と町家を作る職人のお互いの意に通じた智恵と工夫の積み重ねによって成熟してきた。町家の空間と日々のくらしが相互に係わり、影響し合いながら、お互いを洗練された形へと育み続けて来たと言えるのである。

京町家は表通りに直面し、間口が狭く、奥行深い。このような特性は、民家としての特徴の他に、更に特徴的な空間の意味構成とそれに即応したくらしの特性を強くしている。とくに、表から奥への方向性の強さは、「通り抜け(貫通性)」「(表から奥への)格式の高まり(段階性)」などの空間の意味特性を作り出している(写真2)。更に、襖・障子による部屋の分節あるいは連続した使われ方には、「空間機能の重層的な係わり」が、そして、奥行の中に配された中庭、前栽と部屋、座敷きという空間的配置には、外と内と



■写真2—おいえ空間 貫通性 分節と連続

いう「空間の共存的な係わり」が見られる。町家は、単なる事物的なものとしてあるのではなく、そこには事物間の「係わり」を見るという精神的な感性が暮しや空間の中に感受され、積極的に表出される。「係わり」に重きを置いた感性は、都としての文化的環境、自然・地理的環境の中で、繊細で洗練された美的感性、秩序的感性へと培われ、美しく、秩序あるくらしと木造建築としての町家文化を形成した。町家の空間とくらしの中に具体的に、その様子を見てみたい。

●1 通り庭・玄関・中庭 —自然との係わり、間合いの感性

京町家は、基本的に「通りにわ」という土間空間とそ



■写真3—通り庭 通り抜けの土間空間

れに沿った「おいえ」という部屋の連なる空間によって構成されている。通り庭は道路に面した門口(かどぐち)から奥の庭への通り抜けの空間であり、表と内の中間領域である。(写真3)表家部分を通り抜けたところに玄関があり、その後に中庭がある。鰻の寝床と言われる京町家において、中庭はごく狭く、日当たりも良くないので日陰にも強い篠竹や棕櫚竹などが植えられ、棕櫚竹の葉摺れの音にそれぞれの季節の感じを受け止める。中庭は光、風を取り入れる装置であり、また、狭い空間に凝縮させた自然を感受する町家の象徴的空間である。杉本氏(前出)によれば、「中庭は、建物の中に穿たれた

井戸のような垂直の深みを備え、中庭に対する自然の干渉は、四季を通じて、また一日のあらゆる時刻を掩って、絶えず生起する。そして、中庭は、地上のいかなる物よりも、外界の明暗に敏感に反応する。」と言う。このように、中庭という小空間に、自然あるいは外界を繊細に感受し、表象するくらしである(写真4)。

更に杉本氏によれば、「中庭は、家の内と外との中間に、間を取ることを狙って配慮されたひとつの休止符、いやむしろフェルマータと言うべきもの。」と言う。最近の住宅の玄関というものは、一枚の扉となりがしかの下足を脱ぐスペースであり、そこに「間」というようなゆりの感覚が介在する余地は無い。京町家においては、比較的小さなものでも通り庭の形式の中に玄関が面する庭が存在し、町家のくらしの中に間合いをつくる場所となる。「間」は時間の間であり、空間の間である。「間合い」とは、空間・時間の係わりのバランスをはかる微妙な感



■写真4—中庭 自然を感受する間合いの空間

性に基づくものである。このような感性は能、茶、花というような文化の中で日本的な、微妙な精神性の特徴とされるところであるが、京都の町家においては日常の暮らしの中にごく自然に存在するのである。京町家の暮らしには、「間合い」と言うような微妙な係わりの感覚を中庭という凝縮した場に意識させ、表出する感性の豊かさがある。

●2 おいえ空間 一分節と連続 あいまいさの中の秩序性

町家の貫通性のある内部空間には襖や障子という軽い建具によって、隔てられ・分節される空間と開け放たれ、連続する空間という二つの空間が共存する。このような二重構造(重層性)は、空間の機能の「あいまいさ」を孕んでいるとも言える。一方、そこで行われる暮らし振りの中では表から奥に行くに従って部屋の格式が高められ(段階性)、最奥の座敷は客間、主人の間として格付けされる。これは部屋の造作の違いにも確認される。容易に開けられる隔てであっても、格式ある部屋は安易に踏み込むことが憚られる。一見曖昧な空間は精神的な秩序付けによって、しっかりとけじめが付けられている。町家の曖昧さのある空間は、精神的な暮らしの秩序によって、ごく自然に住みこなされていると言える(写真5)。そして、ここにある二重構造は分節か連続かの二元論でなく、二つの事象の心理的な係わり、重なりがある。即ち、軽くて容易に開けられる襖や障子などの建具は、人を隔てることと、人を誘い入れることの両面性を持っている。それを如何に扱うかは人の意思、理性に委ねられているのであるが、それ故に、自分と部屋(の意味)の係わりを強く意識する必要がある。このような住まいの空間と暮らしとの係わりには精神的な奥行き、深さがある。

現代では、職と住の分離、町家と高層マンション、内と外、住まいの個室化など、二元的な個別化があり、そこには係わりを見るという姿勢が薄く、暮らしの美しさを感じられない。町家の暮らしでは、ハレの日と日頃の暮らしとのけじめのある使い分けを大切にしている。日頃の暮らしは祭りや正月などのハレの日を待ち、準備をするための日々として、ハレの日との強い係わりの中に意味付けられている。

●3 外観 一木の意匠へのこだわり 防災と文化のせめぎあい

町家の表外観は、屋根庇や真壁造の木の軸組を見せる直線的な構成を保ち、京格子に代表されるような緻密



■写真5-座敷 格式のある空間

な寸法構成に基づく秩序のある意匠を大切にしている。素材や構造の特性を自然な形に洗練するという方向性をもっている。化粧的な飾りや過剰を好まず、構造や素材からにじみ出てくる奥行き深い美しさである。これが京都における一つの美的感性の本質である。

木造の町並では防火の問題が大きい。京町家の内では、はしりにわ上部の火袋の延焼防止、裏木戸からの避難などの防災対策、町式目による厳しい定めなどがあった。しかし、建物の表には他の町に見られるような「塗り込め」や「うだつ」などの大層な防火処置は最終的にはあまり発展せず、繊細な木の表情を維持する外観意匠へのこだわりがあった。これは防災と文化の係わりのきわどい「せめぎあい」である。京都の表向き^{じやんとうき}の町並み景観においては、防火の形態的手法はむしろ消極的であったとも思えるのであるが、一方、「きわどさ」の中にある緊張感が防火の効果を高めて来たと言えるであろう。

京町家の表格子には様々な型がある。精巧な職人の技と感性によって創り出された京格子は美しく、繊細である。基本的に、縦子とその隙間は同一寸法とされ、「木間返し」と呼ばれる。自由な意匠の中に、きっちりとした秩序を持っている。これを基準として、縦子の寸法に大小の変化を付けたものが親子格子であり、親と子の数の組み合わせによって、一本子持ち、二本子持ち等と呼ぶ。更に、子の縦子の上部を切り詰めたものが切り子格子であり、繊維関係を扱う町家に多く使われるため、糸屋格子とも呼ばれる。糸や着物の品質を見定めるのに、外の光りを少しでも多く取り込むための工夫とも言われている。このように、格子の意匠、構成の美しさについても、それなりの秩序と合理性に基づいている。ま

た、細やかな格子の表情は内と外を隔てるようであり、透かすようであり、その両義性が京都の感性の微妙さを象徴しているかにみえる(写真6)。

●4 伝統職人の技としくみ 一多様性と総合性

町家は伝統職人技術によって支えられてきた。職人の技は、実用性、合理性、美的感性というような多様な要素を合わせ持つ総合性をそなえた全人間的技術であった。木の軸組の構成、或いは仕口、継手などに見られる構造的合理性と意匠性の同一化。素材の大きさを押え、古材を繰り返し活用するという経済的合理性と建物を美しく見せる感性の両面性。格子に代表される構成要素の秩序と合理性のある意匠性。寸法の標準化、素材の規格化による施工の合理化と建具などの転用。職種の細分化、専門化と棟梁がそれを統合するしくみ、技術伝承のシステム、などの中にも総合性を読みとることができる。

通り庭の玄関から更に奥には、はしりと言う炊事などの作業空間があり、火袋と呼ばれる二階屋根までの吹き抜けがある。京町家の妻面は土間の石基礎から母屋まで一気に立ち上がる側柱が半間ごとに立ち並ぶ。床から母屋までの間に桁などの横架材は無く、壁下地として柱間を繋ぐ貫も土壁や漆喰の中に塗り込められて見えないため、柱とその間の壁による空間の垂直性が強調される。そこには、天井の低い「おいえ」空間との対比効果がある。そして、火袋を横断して何本かの繋ぎ梁が渡され、立派な町家ではその上に奥行き方向に牛梁という大きな材が乗せられる。これらの梁の上には、束と貫による木組がある。これらは雄大さと、繊細さをも感じさせる木の構成美を見せ、京都の大工は自らこれに「^{じやんとうき}準棟纂纂」と言う名称をつけている。この火袋は空気



■写真6-外観構造 木の意匠 格子の秩序性

を流し、煙や火気を逃がすという機能と共に、明らかに意匠的意図、美意識があり、職人の総合性ある感性が感じられる。

更に、職人の仕事は暮らしの中に「お出入り」として組み入れられる「しくみ」を持っていた。町家における色々な年中行事に対して、職人はいつも手伝としての労力を提供し、そのかわり、大店とその借家建物についての仕事が常に用意された。この持ちつ持たれつ^{もちつもちたれつ}の関係、住まい手と職人の有機的な係わりがお出入りのしくみである。そこにも人と人、人と建物の間の「係わり」が強く、くらしと技をつなぐ「しくみ」が存在していた。そのような係わりをバランス良く維持する感性があったが故に、総合性のある物の見方や「しくみ」を作ることが可能であったと言える。「係わり」を総合化、組織化したものが「しくみ」である。そのような「しくみ」の故に、町家はくらしと建物を洗練された形に一体化させることができた。また、町家を創造的、持続的に存続させることができたと言える。

3—京町家の再生による景観再構築

感性の再生とアイデンティティーの共有

このような歴史性を見る時、我々は、今社会が必要とする本質的価値としての「秩序性ある美しい都市景観の再構築」に対する責務を感じる。その実行のためには、法制度の整備などの直接的な手法と共に、「持続性と創造性」の根拠となるソフトとしての感性がより重要な役割を持つ。町家のくらしと職人の技の世界には、「係わり」「間合い」などを見る豊かな感性があり、その結果、「合理性」「総合性」のあるしくみがあった。町家再生という、歴史性の持続的、創造的継承の実践の中で、改めてこのような「感性」と「しくみ」を取り戻し、美しい京都の景観形成へと向かうアイデンティティーを共有する。そこで初めて、新たな感性、技術をも適切に受け入れつつ、真に美しい、秩序ある都市景観の再構築が可能となるであろう。

(参考文献)

- 1) 財団法人杉本家保存会理事長 「京の町家」(淡交社)―「町家の住まい記」
- 2) 写真2～6 無名舎 吉田孝次郎家